第８回「第２のふるさとづくりプロジェクト」に関する有識者会議
議事概要

１．日程
令和６年３月 14 日（木）15:00～17:00
２．場所
中央合同庁舎２号館 共用会議室６及びオンライン併用
３．有識者（五十音順）
小崎委員、坂倉委員、佐藤委員、中村委員、矢ケ崎座長
４．議題
（１）　アンケート結果とモデル実証事業の成果報告
（２）　採択事業者による今年度の取組紹介
・福島県福島市ほか（福島県フルーツラインエリア観光推進協議会）
・新潟県南魚沼市ほか（一般社団法人雪国観光圏）
・兵庫県新温泉町（株式会社全但バス）
（３）　今年度の課題を踏まえた来年度の方向性
５．議事概要
○ 採択 18 地域のモデル実証事業について、実証事業の取組結果や来訪者に実施したアンケート結果の説明及び実証事業の最終報告について資料に沿って説明。その後、委員による質疑及び意見交換。
○ 今年度の課題を踏まえた来年度の方向性について、資料に沿って説明。

（１）採択地域の中間報告
○ 観光庁説明資料より資料に沿って説明。

（２）採択事業者による今年度の取組紹介・質疑応答
○ 採択３事業者の取組は以下のとおり。（一部抜粋）
① 福島県福島市ほか（福島県フルーツラインエリア観光推進協議会）
● 養蚕や織物といった地場産業を学ぶことをテーマにした体験ツアーで、技術習得プランを造成・提供することで、短期～長期滞在を促す。本事業では、これまで観光の切り口として着目されていなかった地域に根付く「養蚕」と「織物」のもつ特性を活かし、新たな地場産業の継承および交流人口の受け入れの仕組みづくりに向け、以下の取組を行った。
イ）　旅マエにおけるターゲットを絞った広報
ロ）　目的ごとの短期～中長期滞在プランの提供
ハ）　旅ナカにおける地域住民との交流促進
ニ）　旅アトにおける再来訪の仕掛けづくり

ホ）　地元の次世代に対する普及・啓発活動

- 取り組みとして、以下のような活動が行われた。
  - イ）農家民泊プログラムでは、地域の農家と観光客が交流を深める機会が提供されており、これにより、地域の文化や暮らしを体験することができ、地域住民との関係が深まった。
  - ロ）工房の活動やイベントへの参加を通じて、工房の近隣住民と来訪者の交流を促進した。来訪者とのコミュニケーションが活発化することにより、受け入れ環境の向上に繋がった。
  - ハ）移住・定住団体による街歩きや養蚕農家の作業体験など、特別な体験を提供することで、地域住民との交流を促した。

- 養蚕・織物文化の普及啓発、関連事業者間の交流促進やモニターツアー参加者の再来訪を促すため、イベントを実施した。関連事業者を召集し、制作物展示や地元参加を促進することで、再来訪者 18 名を創出。地元支援意欲が高まり、観光波及効果や他地域との連携も生まれた。
- 自治体とは、福島市、川俣町、二本松市、伊達市と連携した。福島市の観光交流推進室は広報やイベント場所の支援、定住交流課は体験移住支援、文化振興課は展示資料の貸し出し、長寿福祉課は出前講座の広報支援を行うなど、自治体との連携を強化した。
- 課題を踏まえて今後は、ターゲットの明確化、自由な滞在環境の提供、地場産業の継承につながる取組の実施、再来訪頻度に応じた戦略の策定が必要であると挙げられている。

② 新潟県南魚沼市ほか（一般社団法人雪国観光圏）

- 事業の概要として、以下が挙げられている。
  - イ）【場とコトの拡大】いつでも帰ることができる「場」を増やし、多様な「コト」とつなぐ仕組みづくり
  - ロ）【関係性のきっかけづくりと拡大】帰る旅ユーザー拡大のための「アウターマーケティング」施策
  - ハ）【人材確保・育成、運営体制の強化】地域内プレイヤーの理解を深め拡大する「インナーマーケティング」施策

- 今年度事業の総括として、以下を実施。
  - イ）　第２・３のさかとケとなる帰る旅宿泊滞在拠点の拡大
  - ロ）　テーマ別「帰る旅スタディツアー」立ち上げ
  - ハ）　関係性クリエイター育成ワークショップの実施

- 「帰る旅」とは、場と関係性で育まれる旅のかたちであり、「ただいま」「おかえり」から始まり、一方通行ではなく、仲間としてつながり、相互の役割を与え合う関係を築くもので、従来型の旅行とは異なるものである。関係性クリエイターが地域の課題に触れるようなテーマを見つけ、余白がある状態でコンテンツとして造成する。完璧な状態ではない余白を一緒にユーザーと作ることで、関係性を深めている。また旅アト（次の旅マエ）では、SNS 等を活用することで仲間としてのコミットメントを強化し、「帰る場所」を提供し関係性を持続する循環を生み出している。
- 「さかとケ」は、ハウスワーク５時間で宿泊代を無料にするスキームである。コンセプトは、無料で旅行ができるという考え方ではなく、持ち込みのルールや交流のあり方を明確化し、利己的な行動を避けることで、ヤドの方や、来訪者同士の交流を生み出すことである。
- 「帰る旅」には「帰る場所」と「顔の見える関係性」が必要であり、運営メンバーの関与が重要である。運営メンバーである関係性クリエイターが自らの意志や信念に基づくやりたいことをコンテンツとすることが継続性を確保する上で最も重要である。

③ 兵庫県新温泉町（全但バス株式会社）

- 地域課題解決を通じた学び直しをテーマにした「しんせき学び旅（ローカルクエスト）」で来訪する際に、京阪神から高速バスのサブスクプランがあること、また町内の各課題にアクセスするためのコミュニティバスのサブスクプランまで一気通貫での利用環境が整うことで再訪率が高まるかを実証した。
- 地域課題を新資源として整理・提示する「しんせき学び旅」のプランを創出し、地域の方々と一緒に課題解決に取り組むとともに、京阪神からの新温泉町へのアクセスや町内の地域課題までのアクセスを容易にするサブスクプラン「新温泉町たんけんパス」販売の実証に取り組み、再訪の効果性の検証を行った。
- 実施体制はバス会社が主体となり、新温泉町や地元の観光協会や組合と連携して実証した。地元の関連団体の協力で、３つのパーティを組成し、ローカルクエスト事業を実施した。
- 地元の周遊バスと連携し、初めての取組として１か月２回以上の来訪を想定したサブスクプランを導入した。結果としてのべ 63 名が利用。
- ローカルクエストとして自然環境、古民家再生、美食をテーマとしたプログラムを造成した。初級・中級・上級のクエストにのべ 255 名が参加した。コアなファンがつくれただけでなく、地域の方のやりがいにつながった。ただ、参加者のサブスク利用にばらつきが生じる課題が残った。
- 地域住民とコンシェルジュ向けのワークショップには 13 名が参加し、受け入れ体制構築の強化を行った。
- サブスクプランを導入したことで、一定の移動しやすい環境が整ったものの、事業者目線で設定した部分も多かったため、利用者が利用しやすいプランの設定期間や

料金等を今後検討していきたい。また、ローカルクエスト事業により地域住民に新たな発見があったものの、フリーに来訪者を受け入れたこともあり、結果として地元の負担が増加してしまった。

○ 委員の主な意見は以下のとおり。

✓ 観光庁説明資料の中で、事業の自走化に向けて秀でた事例を創出するには至らなかったとあったが、自走化に向けた取組や実証していく中でのヒント等が得られたかどうかを伺いたい。

【福島市ほか】

自走化のため、養蚕の副産物の商品開発を進めている。ただ、まだまだ関係者にはボランティアとして動いてもらっているのが現状であるため、教育関連や自治体の移住・定住部署等に協力を求め、あらゆるところから収益を得られるような仕組みを模索している。。またNPO法人を設立し、人材雇用や活動資金の調達に取り組むほか、商品開発のために小規模な分科会を設けるなど、今後の自走化に向けて動き出している。

【南魚沼市ほか】

さかとケのような無償で泊まれる仕組みを提供しているため、直接消費をしてもらいそこから収益を得るというマネタイジングの面では、まだまだ課題が残る。ただ、帰る旅研究会のスキームを活用し、集客面でのサポートや同業者との話し合いを行う機会を得られるため、プレイヤーとして参加している地域の宿泊事業者や市町村の観光行政の方々がやりたい企画を実現できているという点では成功できているといえる。さかとケは、不足している人材を補填するという点ではリターンは得られている。また、２年目として組織づくりの面や仕組みの面で成果を得られていると感じている。

【新温泉町】

今回、移住・定住を促進するために高速バスのサブスクを導入したが、月単位でのサブスク提供や活用路線の制限等に課題があがった。本事業を契機に新温泉町との移住・定住の話が進んでおり、バスターミナルには移住・定住の情報コーナーを設け、バス利用者が流れ込むような仕組みをつくることで、今後は外部の人と地元の方が交流できる場所をつくりたいと考えている。また、地元の方の取組をより活発化させるような仕組み作りを次年度以降取り組んでいきたいと考えている。

✓ ３つの地域の登壇を通じて、事業を進める中で、さまざまなネットワークが形成され、多くの付加価値が生まれることを実感した。自走化に関しては、訪れた人々が地域の一員として参加し、地域社会に溶け込むことが重要なポイントであると再認識した。

✓ さかとケの取組で、来訪者がお手伝いをするスキームをもう少し詳しく知りたい。

【南魚沼市ほか】

さかとケには共同キッチンスペースがあり、来訪者の交流の場となっており、コミュニティボードやLINEのオープンチャットを活用し、参加者同士の交流を促進してい

る。また、受入側の業務負荷軽減を行うことも事業を持続可能に行っていくために重要だと考えている。そのため、来訪者に対してレクチャー動画を活用するなど、通年で受け入れ業務を効率的に行いながら、楽しく来訪者を受け入れできる環境づくりを目指している。

- ✓ 観光庁説明資料のアンケート結果の中で、「新しい知識や経験を得たい」「地域の人と交流したい」「地域のためになることがしたい」「地域づくりやイベントなどの手伝いをしたい」等のキーワードで再来訪をしたいという声が見られる。再来訪を推進するために、現地(地域)の受入側の人々（スタッフやコーディネーター含む）が負担に思っていることと、地域との合意形成に対して課題に感じていることについて伺いたい。

【福島市ほか】

来訪者の方々が温かく、自ら手伝いたいというような自発性が生まれており、地域事業者との関係も良好であった。地域との合意形成という面では、事業設計の最初の段階で同じ方向性を向けることが必要であると考える。

【南魚沼市ほか】

来訪者と地域をつなぐ関係性クリエイターを育成するプログラムに、帰る旅に関心のある事業者に参加してもらい、帰る旅研究会のビジョンと参加プレイヤーの個人のWILLがどう重なるかを２日間で確認した。ここで共感した方が、翌年度以降にも参加している現状で、他のエリアの事業者や自治体の関係者も帰る旅のメンバーとして参加するようになってきている。

【新温泉町】

「ローカルクエスト」では各パーティを初級・中級・上級に分けていたが、地域ごとの受け入れにばらつきが生じた。今後の対策として、地域にキーマンとなるような存在を育成しするだけでなく、地域の人と来訪者の相互理解を促進し交流を活発化させるために、地域の人が来訪者の地域を知ることも必要であると感じた。

- ✓ 第２のふるさとを進めるためには、人が大事であると考えている。新温泉町の相互交流や南魚沼市の関係性クリエイターの研修も興味深いと感じ、これらを全国に水平展開し、人をどう同じベクトルに持っていくかが非常に重要であると感じた。
- ✓ 第２のふるさととして、２回３回来て欲しいというアクションが結果として見えている。再来訪の本質的な意味として、インセンティブがあるからではなく、その人にとって、地域が他人事ではなくなる、普段の生活では得られない価値があるといった、”内的な動機付け”が背景にあると感じた。通常の旅行では、観光客本人が変わることは前提としていないが、今年度の実証では、来訪者の意識や関係性に変化や変容を起こし、地域との新しい関係を生んでいると感じた。
- ✓ 再来訪者の行動の変容について実証事業を通して感じたことを伺いたい。

【福島市ほか】

「血縁に関わらない親戚付きあいみたいな関係」になることが重要であると考えている。

【南魚沼市ほか】
　コトをコンテンツとして用意はするが、あまり作り込んでいない状態で提供することや受入側から一方的に説明するのではなく、ユーザーから会話・発言してもらい、積極的に傾聴することで、自分の意見を聞いてもらえる場・共感してもらえる人として認識してもらい、自分の居場所と思ってもらえるような関係性をつくっている。
【新温泉町】
　現地まで行くのが不便であるといったような、交通だけのせいにせず、たとえ遠くても地域に移動することに価値を感じていただけるような環境づくりが大事だと考えている。

- ✓ 来訪者の心の動きを把握することが重要であると考えている。離脱する人を想定しながら、事業を組んでいくことも次年度以降大切であると考えている。

（３）採択地域の中間報告

○ 観光庁説明資料より資料に沿って説明。

○ 委員の主な意見は以下のとおり。

- ✓ 自走化について、審査項目についても対象になることは素晴らしい。自走化につながるような審査項目の配点を高くするなど検討してほしい。

【観光庁】
　公募要領上は、配点の詳細は公表していないが、どういった配点項目を重視していくかを、庁内で検討している。今年度事業を通して、マネタイズ、人材の確保といった面で自走化につながる取組が分かってきたところではあるので、そのような部分ができるだけ反映できるような審査基準としたいと考えている。

- ✓ アンケートの結果から、若者が多く参加していることがわかったため、若者にフォーカスした知見を得られるような事業を採択するなど配慮していただくのも良いかと思う。

以上